

清水昭美

文学のなかの看護

医学書院

清水昭美

文学のなかの看文

医学書院

著者略歴

清水昭美(しみずてるみ)

本名(長倉昭美)。1954年神戸大学附属高等看護学院卒。臨床看護を約5年の後、1959年より看護教育にたずさわる。1971年大阪大学医療技術短期大学部講師、1977年同短期大学部助教授を経て、1984年より千葉大学教養部講師(法政大学文学部日本文学科卒、中央大学法学部法律学科卒)

著書：『その人のための看護』医学書院(1974年)、『(増補)生体実験・安楽死法制化の危険』三一書房(1979年)

共著：『公害・安全性・人権』読売新聞社(1972年)、『医学は人を救っているか』朝日新聞社(1973年)、『医療を支える人々』朝日新聞社(1973年)、『医療と生命』(医事法学叢書第5巻)日本評論社(近刊予定)

文学のなかの看護

定 価 1,700円〈検印省略〉

発 行 1985年12月15日 第1版第1刷◎

著 者 ^{しみずてるみ}
清水昭美

発行者 株式会社 医学書院

代表取締役 椿 孝雄

電話 03-817-5600(受付台)

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

印刷・製本 大日本法令印刷 用紙 大王製紙

本書の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権
出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。

ISBN4-260-34982-1

まえがき

文学作品を取り上げて看護を考えてみよう、と改めて思い立ったのは、臨床に出て病人に接するようになってからである。それは臨床の現場が、人間の苦悩の坩堝もどとさえいえるようなものであったからであらう。

死の間際まで、ソロバンを手から離さなかった商店主。夫を待ちつづけた若い妻の臨終。悲しみ嘆く母をいたわりつつ死んだ幼い子供。手術を前に不安を訴える病人。先天異常児をかかえた母親の苦悩。白衣をつかんで離さない重症者。病人が死亡した後、大声で笑う家族。「死にたい！」と訴える老人。沈黙を続ける自殺未遂者。激痛に苦しみ悶える病人。誰も見舞いに来なかった幼児の死。研究至上主義で進められる生体実験。そしてその実験に苦しみ泣き続ける乳児や未熟児……。

医療の現場は、現代社会の縮図なのであらう。しかし、そこでは、人間社会のさまざまな現実が生々しく鮮明に映し出される。人間の醜い部分も、美しい部分も、強い面も、弱い面も、あらわに表出される。そうした臨床の現場での戸惑いの最たるものは、医療的処置の仕方を知らないとか、看護の方法がわからないとかいうこともさることながら、何よりもさまざまな人が病んで救いを求めている時、日々仕事としてその人に接し、応えていくことのむずかしさであったと思う。毎日毎日が驚きの連続であり、病人という「人間」について、わからないことがあまりに多かった。自分の未熟さ、人生経

験の浅いことを、思い知らされる日々であった。

目の前の病人を、処置する相手という一面だけでなく、〈そのひと個人〉として理解しようとするには、自分のわずかな人生経験と知識だけでは、とても足りなかった。そのような中で、折にふれて思い出し、参考になったのは、それまでに読んだ文学作品の中のいくつもの場面であった。若い頃から読みためた文学作品が、思い返すと、とても大きな私の支えになった。

社会には、さまざまな人が、それぞれの生活を営み、一人ひとりが喜びや悲しみを感じ、痛み、苦悩し、そしてその人の人生を終えてゆく。その間、種々の欲望が織りなす人間模様が生ずる。私にとって、文学作品は、看護に欠かすことのできない人間性の学習の宝庫である。文学作品は、このような人間の姿を、よくわかるように示してくれる。看護者として、それを理解することが、明日の看護にプラスになると思う。

本書は、雑誌『看護教育』に「文学の中の看護」と題して何回か掲載したものに、全編多少手を入れ、さらに新しく三編を加えてまとめたものである。病人のかかえる苦悩が重く、看護する側との距離があるほど、看護者は背伸びをし、肩をいからせがちである。そのような時、深呼吸をするように文学作品から糧を吸収することをおすすめしたい。

ここに取り上げた文学作品については、雑誌などに私の論評を発表した後も、看護教育の場で学生と共に、看護を考える素材として活用してきた。臨床実習で参考にしたこともある。臨床で働いている人とグループ討議を重ねたこともある。いずれの場合にも、人間理解という面で、あるいはケーススタディの素材として、学生や臨床で働く看護者にとって大いに参考になるものであることを知った。

言うまでもないが、文学作品は、それぞれ読む人の受け取り方によって異なるものであり、この本に述べているのは、看護という視点からみた私の読み方である。

また、本書は文学作品に対する批評や評論ではなく、あくまでも作品を素材として、そのストーリー展開や人物の言動を通して、看護のあり方や看護婦の姿勢を考えるものであり、原作者の意に必ずしもそわないような見方や解釈があるかもしれないことをお断りしておきたい。本書を読まれる方々は、できるだけこれらの原典を読んでいただくようお願いしたい。

なお、原典からの引用に際しては、原文に忠実に、かつできるだけ引用箇所を「」で示すようにしましたが、ことばづかいなどの一部を現代表記にしたものがあるのを付記します。

一九八五年 秋

清水昭美

目次

1	誰のための安楽死か 『高瀬舟』（森鷗外）
2	死のなかに生を見つめる目 『禁じられた遊び』（フランソワ・ボワイエ）
3	死者からのお弁当 『原爆の子』所収・田中清子さんの記録から
4	〈真実の光〉のなかでの死 『イワン・イリツチの死』（トルストイ）
5	〈その人にとっての〉幸せとは 『泥人形』（佐多稲子）
6	〈いのちの定年〉の虚構性 『橋山節考』（深沢七郎）
7	助ける者、助けられる者の関係 『身投げ救助業』（菊池寛）
111	
95	
77	
61	
39	
21	
1	

8	エゴイズムと愛の間に 『こころ』（夏目漱石）	129
9	死にゆく者、看とる者 『春は馬車に乗って』（横光利一）	145
10	へ生ける屍の人権を守る看護 『ジョニーは戦場へ行った』（ドルトン・トランプ）	167
11	生体解剖―問われる医療の原点 『海と毒薬』（遠藤周作）	181
12	呆け老人の幸せを支える看護 『恍惚の人』（有吉佐和子）	203
	おわりに 看護を考えるヒント 素材としての文学を、看護の臨床場面にどうかすか	223



誰のための安楽死か

『高瀬舟』（森鷗外）

患者が闘病をあきらめたり、自ら命を絶とうとしたり、家族が病人を見放したりした場合、看護婦はどんな対応をすればよいのでしょうか。患者や家族の言うがままに従うことや傍観することではないでしょう。

患者の信頼にこたえる看護は、患者の訴えをよく聞いた上で、どうすることが本当にその患者のためか、を判断し、（言いなりに従うのではなく）必要な時は心から忠告をすることができるよう、心のこもったもののはずです。

『高瀬舟』に登場する弟が自殺を遂行できず、苦しみ悶えている場面は、強烈な印象を与えます。ここだけに目を奪われると「助けるよりはいつそ死なせた方が……」と、弟の自殺幫助をした兄の行為に同情的になってしまいます。ですがそれは、自殺を企図するほど追いつめられている病人の「生きる権利」を忘れてしまうことにならないでしょうか。

『高瀬舟』は安楽死のモデルだろうか？

半年病床に伏していた弟が「早く死んで少しでも兄貴に楽がさせたい」と、かみそりで喉を突いた。兄の喜助は弟に頼まれ、せがまれて、死にきれなかった弟の喉から、かみそりを抜き、弟は死んだ。森鷗外の名作『高瀬舟』のこの筋書きは、江戸時代の庶民の貧しさと病気を思いやる多くの読者の涙を誘ってきた。

京都から大阪まで同道する同心羽田庄兵衛が、護送の乗物である高瀬舟の中で喜助を見て、「いかにも楽しそうで」、同心への気がねがなければ口笛か鼻唄を始めそうで、「遊山舟にでも乗ったような顔をしている」と思って気を引かれる書き出しから、読者は思わず引き込まれてしまう。筆致の確かさでは他の追従をゆるさない鷗外のことである。喜助の晴れやかな額や目のかがやきの謎が、「自分のいてよい所というもの」がこれまでなかったから、「お上で島にいろとおっしゃって」くれたのがうれしいこと、遠島に際して鳥目（ちょうもく）二〇〇文をもらったが、借金に追われ続けた喜助が、はじめて自分の金を持ったので、島のしごとの手元にしようと楽しみにして喜んでいること、などと解けていくあたりになると、庄兵衛ならずとも「喜助の欲のないこと、足ることを知っている」のに驚いて、その「頭から毫光（ごうこう）がさすように」思ってしまったようになる。

このような「できた兄喜助」が弟の自殺を助けるヤマ場では、読者はすでに喜助ファンに仕立て上げられていて、庄兵衛が「これが果して弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが起きてきて、その疑いを解くことができなかった」という締めくくりでは、「そうだ、そのと

おりだ」と共感の中で拍手喝采する気分になっている。

一気に読むと、いかにも罪人となった喜助がわれに思える。ところが、何度も読みかえしてみると、少しずつイメージが崩れてくる。気になる表現を検討しながらじっくり読むと、喜助の人間像も庄兵衛の驚きも当初の印象とはかなり違ったものにみえてくる。喜助は果たして弟を思うあまりに殺したのだろうか？ という疑問が浮かんでくる。逆に、論理を追っていくと弟の方が、兄思いの人物に思えてくる。

この小説が〈弟思いの安楽死の物語〉だという受け取り方は、こうなると大いに疑問である。文章による限り、単なる〈自殺幫助〉であって、〈安楽死〉ではないと私には思える。真相を感じかせず、安楽死の悲話と思い込まされてしまうのは、実はこの話が貧困と病いの苦悩をたたみこんで〈自殺企図者の肉体的苦痛〉——それを見ている側の感情〉にすりかえていく鷗外の筆のテクニクにあると私は気づいた。ここに至って私は、鷗外の筆のマジシャンとしてのみごとさを、すこし皮肉な意味で、あらためて認識せざるを得ないのだ。

以下、焦点をいくつかに絞り、問題点を指摘したい。

「安楽死」と「自殺幫助」のちがひ

この小説は、安楽死のモデルとして、しばしば引用されてきた。

喜助の話聞いたあと、庄兵衛は安楽死の概念の原形のような形で、「弟はかみそりを抜いてくれたら死ぬるだろうから、抜いてくれといった。それを抜いてやって死なせたのだ」と考えたうえで、疑

間に思い「そのままに置いて置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいといったのは、苦しさに耐えられなかったからである」と、彼なりに状況をまとめる。そしてその苦しみを喜助が見るに忍びず「苦から救つてやろうと思つて命を断つた。それが罪であろうか」と展開している。

鷗外自身も、庄兵衛の思いとして語らせるといふ間接話法にとどまらず、『高瀬舟縁起』に、さらにはつきりと書いている。「病人があつて、死に頻して苦しんでいる。それを救う手段は全くない」といふ状況であつたら、そばで見ている人は「苦しみを長くさせて置かずに、早く死なせてやりたいという情は必ず起る」のだから、多少死期を早めるかもしれないが、麻酔薬を与えて「楽に死なせて、其苦を救つて遣るのがよい」とする「ユウタナジイ」(筆者注『日本語訳は安楽死』)の論を紹介して、「高瀬舟の罪人は、ちようどそれと同じ場合にいたように思われる」と判断している。

読者は、『高瀬舟』の喜助の語り口を読んで「気の毒に……」という情動にゆさぶられたあと、続けて庄兵衛の解釈と、鷗外自身の結論をひとつながりで読まされ、事例につづく理路整然とした二つの解説にうなずいて、深く考えもせず賛成してしまふのが普通ではなからうか。

ところが、本文をていねいに読みかえてみよう。状況は安楽死肯定論の結論に結びつくような要素を含んでいるであらうか。妥当あるいは止むをえないと思えるような要素が、ほとんどゼロに等しいのに、驚かされるのである。

貧しさと兄への気かねが自殺企図の動機

第一に、弟は病氣のために死に頻したのではない。確かに病氣は話に出てくるが、それは弟の死因

や苦痛とは何ら直接の関係はない。弟はあくまで、自殺しようと喉を突いて、死を近寄せたのである。読者が「気の毒に」と考えてしまうのは、貧しさと、そのために起こった弟の「兄貴に樂をさせた」という美しい気がねのためである。決して喉を突いたあとの、のたうつような肉体的苦痛に対して「気の毒」と思うのではないのだ。この二つを混同すると（混同するように鷗外は非常に巧みに誘導するが）、一足飛びに〈安樂死賛成〉に飛びついてしまいやすい。

事例の状況をガラリと変えてみよう。何ひとつ不自由のない、金持ちの幸せいっぱいの弟が、ふとした気まぐれから、自殺しようと、かみそりで喉を突いたとする。そこへ兄がやってきて、かみそりを抜いた。この話であつたなら、すくなくとも情動的な安樂死賛成論は起こらないであろう。気まぐれ男の自殺を、兄が助けて達成させただけなのだから当然だ。自殺を図った動機が、貧困とその中で、気がね（あるいは愛情）でなかったなら、同じ自殺でも、読む側の、喜助に対する共感や同情は、激減するといつてよからう。その貧困と、病人に対する社会福祉の欠如にこそ、鷗外は読者の目を向けさせるべきであつたと私は考えるが（たとえば『高瀬舟縁起』の中においても）、それは後に詳述する。

念のために書き添えれば、弟の病氣は、精神的な苦悩は大きかつたであろうし、それは「弟は、わたくしを一人で稼がせては済まない、済まないと申しておりました」という喜助の話や、「兄貴に樂がさせたいと思った」という弟の話から十分うかがえる。しかし、それ以外の肉体的苦痛のほうは、何も書かれていないし、作者の胸中を推測すれば、その苦痛は大したことはなかつた（大きな苦痛は作者の構成に不要であつた）といつてよいであろう。

「耐えられぬ肉体的苦痛」のためか？

私がこの小説は〈安楽死〉でなく、単なる〈自殺幫助〉の状況にすぎないと判断するのは、ひとつにはこの原因からである。自殺であっても、安楽死が起り得ないわけではない。しかし、庄兵衛も語っているように「苦しさに耐えなかったから、早く死にたいといった」というのが安楽死の必須の要件になる。昭和三十七年の名古屋高裁の判例では、①肉体的苦痛、②本人の真摯な意思、（以下略）があげられている。

ところが小説中で、弟は肉体的苦痛に関しては、喜助が医者と呼ばうとするのをさえぎって「医者がなんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む」というただ一箇所しか訴えていない。なるべく緩く解釈して拾っても、その前に、自殺を図った説明を話した中で「物を言うのがせつなくていけない。どうぞ手を借して抜いてくれ」という箇所を追加できるとどまる。

「医者が何になる」のせりふは、再び左手で喉をしつかり押さえる動作をすることができた、その程度の苦しきの中で発せられたのだし、「抜いてくれ」という訴えは「苦しいから」ではなく、彼が自殺したいと思ったし、いまでもその意欲は持っているからである。そのことは弟が前の場面からずっと口にしつづけていることである。「ああ苦しい、抜いてくれ」とひとつながりで書かれているから、苦しいので抜いてほしいという訴えに読み取られやすい。しかし、この前でも後でも弟は「抜けば死ねるから、抜いてほしい」と訴えつづけているのだから、「ああ苦しい」というのは、抜いて欲しい理由ではなく、間投語のような性質の言葉と受け取るべきである。つまり弟は、この場でも「苦しいから、かみそりを抜いて楽にしてくれ」と訴えているのではなく、相変わず「抜けば死ねるから」抜いてほしいと思っていることが十分読み取れる。また、「物を言うのがせつなくていけない」という言

葉は、長々としたせりふを、しっかりと話している文章の中の一節なのだから、これだけの話をできる弟が、肉体的苦痛に負けてしまっているとは、とても考えられない。

「耐えられぬ肉体的な苦痛」という点のみでも、弟は肉体的苦痛から逃れたくて死を求めたのではないから、庄兵衛の「早く死にたいといったのは苦しさに耐えなかったからである」という受け取り方は誤りである。鷗外の「苦しみを長くさせて置かずに、早く死なせてやりたい」という解説もこの場面には全く当てはまらない。

苦痛と死因の関係は？

次に弟の死因だが、それは気管を切り開いたためではない。気管切開はむしろ逆に救急処置として知られている。喜助が抜いたときに頸動脈を傷つけたのであろう。鷗外も喜助に「今まで切れていなかった所を切ったように思われました。刃が外の方を向いていましたから、外の方が切れたのでございましょう」と言わせて、これを暗示している。江戸時代の医師が十分手当てできたかどうかはともかく、弟の生命のためにはとにかく医師にかかるべきであった。それをしなかった喜助の無知はやむを得ないとしても、人間の生命の重さを考えれば、無知に基づく判断の誤りを是として一般人に勧めるような印象を与える文章は、悪影響がはなはだ大きいことを指摘しておく。

「肉体的苦痛」と「精神的苦悩」との混同

さて、弟は、さぞ苦しかったろうと読者が誤解させられるもう一つの場合が、兄弟の会話のあとに

加わる。判断力を失った喜助が、「弟の目が物をいうように」思ったという描写だ。「早くしろ、早くしろ」と恨めし、そうに喜助を見る。「段々陰しくなつて、とうとう敵の顔でも睨むような憎々しい目になつて」くる。喜助は「とうとう、これは弟の言つた通りにしてやらなくてはならないと思つて」しまふ。「しかたがない、抜いて遣るぞ」というと「弟の目の色がちりと變つて、晴やかに、さも嬉しそうになつたという。

しかし、ここで注意せねばならないのは、弟が目で「恐い催促をやめない」理由である。それはあくまで自殺を達成したいからであつて、肉体的苦痛から逃れたいためではないことである。兄の生活の負担を減らすために、ここまでいちずに、自分の身を捨てることを求める弟は、精神的には苦しい過程を経たであろう。だから読者が感動を覚えるのは当然である。しかし、肉体的苦痛で七転八倒しているわけではなく（そうであれば「恐い催促」など、到底できない）、しづる兄を励ますほどの余裕を示しているのだ。ここまで思いつめさせたのは何かを考えてみると、それは貧しさと病気のなかで兄に対する気がね、ないしは、「樂をさせたい」という愛情のためである。決して「傷の苦痛から逃れたい一心」ではない。

「苦しい」という言葉の意味

同じ「苦しい」と言葉は同一だが、弟のような精神的な苦惱と、のたうちまわつて「殺してくれ」と叫ぶ病人の肉体的苦痛とを、鷗外の誘導にのつてイメージを重ねてしまつてはならない（鷗外は、意図してこのような構成をしたというより、自分でもこの二つを混同していたふしが見える）。

ここで対比したいのは、鷗外の小説の原典となつた『翁草』（おきなぐさ）のほうの筋である。鷗外